





新編俳諧文集下



燕庵蟹守著

端つらり

月居

獨酌つらりと疎即るに客あり枕とおくくかて  
いそく梅えんんと寝てありふ平今 夏のうちあ  
津路ある佳人とうちかき季居るこおあさくしう  
乃ちとらそくしつれもあれ象きあの羅浮山平枕ん  
とて佳むおあ、おさあく、まらう縁の、ささの、か  
花のまきす、さく、ち入る、あ、の、挿、あ、れ、や

咲あさき梅あ本のるもくえの、さ



炭説

椿堂

崇省能名の錦帳の下等如唐を催り得ん  
まじつこのまゝ又逢ひの関ハ誠ちん續松乃  
もえさうも高き即妙ありありの云を  
あり啞とありと擡りよ卧衣をさけて離と報  
これみよ其用と達以歎炭ハ者つり如形よ  
多本のさう一炭のをねとよを法師と體あり  
月あも悪く言もさう

瓢藏銘

雪雄

いよあも時も違ふさうも心あうる毎事  
おつて成のまゝ及故乃端平何れと書つけ  
そ城窓のあうり蛇の下ふ引らしてそ中  
寐も起もさけい俳諧さあものさありり  
洒掃の事僕銘さゆめ不見をつさけとも  
たみかけを遇一ひらをもさふこあれる金  
うさふはれぬと句歌或人ささるる  
さふさひて斯瓢藏さおと吐たふか  
つさく是瓢を臺僕ら煩瑣さすくさ  
小乞て一をさつさうさありよて銘さ  
汝は大方して世一見く醫輕うして西

下

二



やま〜嬉心盈〜若是誠得〜八目鼻  
を書て乞兒手與へむ

三原茶隠書画帖序

篤老

昔の法大納言の年よりせむい前法大納言とよそれ  
さき隠ひ〜後京行や〜とある 往還端手  
飯家をたて茶を接待せ〜めあひてさほ〜の  
淳世を〜を穿せ隠ひ〜の海らの水あを  
さみ〜せさき隠ひ〜何や〜乃字紙手  
〜〜〜おぼえ〜何〜り〜字紙帖

とも表題と〜失念〜これ大納言の飯家名とも  
籠身乃ぬけ〜あれとも〜あ〜も引〜け  
ま〜三原茶隠此一卷と〜〜〜大納言  
わ〜隠居〜飯家も〜茶一〜も  
接待ハ〜と〜人〜人画か〜物書程  
師匠借師と撰を〜その茶の一巻〜と  
隠居の法茶茶の〜他〜と守わ〜飯家  
町人む〜と今と月ふ〜人のお遣〜  
風流の志〜と〜〜とおぼ〜  
篤老小巻紙を乞勿端辞退せぬを〜  
頃ハ文政三年外月等花園の小巻の昔



花の香を暮年をくさくさしく

### 犬坊主傳

卓池

犬坊主をいつのまに人づかきお氏何某の男と云  
ふをきくは彼の竹林の徒あわわりのを復ら  
昔河のあみ豆をひじある佛徳山のあみ豆の  
案年大を抱く却に人呼ぶて犬坊主をいつか  
形かふ人の哀うう折く夜あをきせ侍まじ  
わらわりのをきくお物をとるは食物ともも孫よけ  
まらりあうううとてあまもくは市中ふあてら

小路く結露を拾ひ月乃夕へ野に嘯を花乃  
わらわりの山おねい飄くくくあるたわくある日  
言場の橋のあまみ人まかすてく同むむれ  
ともさくおをををををの志くはく  
あふあるは人月あふ對く無常迅速のそく  
あきを思ひあくくあふおをぬるお庵も  
むきくををををを路をさけくくをむくくあ  
やうて都卒の雲の上を生れおんあとおひ  
中流候のれり徳徳くくああ人も卒  
あくく後の志のひるあもたれく其あ  
あくくあををををを



芙蓉扇賦

瀾古

予う別荘を竹樓と号して常小雀を電以  
其葎の以へ〜門扉の覺小松と富士の目小  
く見えそやうたあ〜の景及癖むむおあ〜  
琵琶湖の八景もをさ〜省る海〜を以て  
主人の控室のあやと晴小け〜め〜うろつと  
ゆりやうと被交ふ初て見るに幾年もぬりし  
こ〜ふあきれ〜せんまもあ〜思ひよるあ〜に枯  
芦を葉を底を焼く壁紙〜ぬら〜窓とあ〜  
須磨の伏屋の古底の板小芙蓉扇をかひ付て

見れば儂借めとよきあ〜し霞とを紫考家  
はま伏小籠る何ハ松柏の葉〜楓〜と〜て更あ  
人語の響を志ら〜夜小笑ふ健と樹の葉〜  
そのた枕城こ〜り余情思ふよりもあ〜は里彼の  
破戸をむ〜けハ滄海渺〜と〜て礼山〜ら  
つ〜ありて正きあ〜と遠きあ〜季履るあ〜ハ抱る  
まあ〜そ〜う〜ふ〜何〜ぬ山のさ〜巖わ〜れて  
そ〜乃窓〜ぬ〜う〜か〜と沖のあ〜ら〜めを白  
めの新をむ〜〜て〜〜は〜人〜小〜歩〜の〜こ  
う〜ひ〜を〜あ〜〜も名小負〜山溪名の橋の流  
る虎関のあ〜〜あ〜れ出猪の鼻のき浪ハ尾



花を風のわらわの舟に吹かしてその山みの控帆ハ小  
艇のたを流しぬひくく波さるり出て釣を子  
簀小舟と蛇籠杭鴉のきふ浮み旅人のしりかへ  
多敷小今切の取帆を見送り宇布見山依の  
回運ふり一は禁けふまは風を以てみおそぬ  
かゝに靡く風情ありてわらわれあり伊依地さ  
を海の入江くくむくく之松の汐干疲て  
屈曲あつうう画さうあゝ村櫛村の瀏濤ハ  
細江女々浦小横きさるるは傾く一管屋ふおひ  
く管あはははもひをさるる一甲斐の白根と  
佐渡路の山くをふまへて遠あり 琴檜小

あはる馬金ハ伊ま依流の琴檜ふ通ひ時を  
以て村鳥ハ浪名の橋お侍をうう一浪坂  
かやう入日お影も月みうさう一浪おむまは  
舞焚簀うまふさりの巴さほく一さるたあも只  
この窓をもてちんやうあえんて其気色現然  
とて英人の容顔粧ふ如く百景百興と  
るりあられハ撲るもの名あたらしとも夜ふ  
見には真小籠り居て誓おちのあふせまを過ぎ  
荏々もお教へふちせて誓の海をいひまて  
路のちんやうおあのみ



送友人西游序

蟹守

富士ふりて三月七日八日と箱根越え海嶽宮の  
うろとへあそび友人何事と駿河路や宇津乃  
山とえいそ伊勢の所神小指と大和めらり  
そとそ物立を嵩のやふくくと見え送りぬ  
そもく能因法師を記ろそぬ嶽平白川の  
譽と遊〜彼上人ハ西ふ東ふ杖屐て  
ふそ見法師の名を傳ふ今ふと御詣り  
たふれ世を瓢箪のころくふれせ行く奇  
境疎迹を探んそ思ひや〜れそ義〜所謂

少文の山水の癖司馬氏、壮遊めもをこく  
お〜し〜とそ目心や大井川の安〜と  
ゆけ〜人の脊ふ買れと越るそそ芥川  
あ〜そとを〜きれ鞠子の宿おと〜けり  
せふゆえそ旅名お〜と翁の奇骨もあの  
つ〜沈吟せ〜れ折ふふれ〜流教寺ありある  
べ〜これハ茅野の嵩をよ〜那の花紙園豆  
腐ハ豆腐能味ひよ〜強気か〜と来よせ  
か〜と海よりせ〜と〜



其夕女句帖序

玄蛙

おと文もみはとよみもひと古めうとて  
久方れあ海の橋立おつくりをり啼 吾妻の果  
まてもふみや習んと思ふ心も先ハ雲をり出  
雲如神垣へを越えある其夕々女らるのふて記  
るもひと甲斐くしこれハ家西風の道を踏  
習んと思ふあを娘を憂えよと思ふあをくは  
風流の菊と心ゆへに艶麗をたみよ海へふ来  
あまと思ふへくはけさの洒落と心ゆへし  
夫乃以あまの心酔たうと思ふへくは能楽の

前句とくろえべし教句と吾理耳 他うんと思ふべ  
くはあふられたる自然ふ任まじし己ぬよま  
思ふへくは又下まとも思ふあまをり たぐ  
世道の先まよま違ひて松をあより 艶あるまけも  
あまひ又馬ふ吟をまじく様のみりも同じて晝  
飯ごろもの二見浮き紫お玉の敷くを乞ひ寝て  
浪あはるり乃きびつくしともあま たうんあ  
それ古池の水底をるるの甲斐あまをりあれ  
端みと心ゆへにまよまをりあまのくはるるを  
書きあまをり







わ〜只与二島多衆を舞まふ拍子よく合え  
島の千歳り扇ふるよりもつとあひ〜りしたく  
を〜む〜く〜る五ツのきまあ〜のそのふかき〜を  
ふん〜下〜千〜わ〜の〜半〜銭〜あ〜る〜れ〜を〜煎〜た〜ふ  
さ〜ん〜花〜さ〜く〜ま〜の〜ま〜い〜さ〜け〜え〜是〜も〜亦〜採〜と〜法〜ら〜に  
お〜こ〜せ〜と〜さ〜さ〜さ〜の〜あ〜〜〜〜決〜ま〜さ〜の〜圃〜く〜さ〜と〜あ  
り〜て〜廢〜る〜こ〜と〜あ〜〜〜さ〜く〜量〜り〜増〜の〜實〜の〜事〜を  
盡〜る〜日〜の〜良〜〜と〜志〜の〜〜〜〜〜し〜ん〜さ〜か〜と  
〜〜〜ふ〜あ〜〜

息杖辨

豪山

元天地の空み留して功あきまのいそき息杖に  
中おも横杖を四牧六牧肩伴違看板小榮耀ハ  
尺のまきとも野々々醫の雇まことありてハ非命の七  
と老あ〜わ〜る〜を〜橙〜門〜の〜横〜糸〜あ〜ら〜浮〜雲〜の〜留〜を〜思  
ひむひ〜り〜汝〜り〜質〜ハ〜竹〜み〜〜直〜く〜あ〜る〜を〜む〜〜ま〜れ  
とも多〜ハ〜片〜咀〜藪〜垣〜より〜權〜出〜さ〜ま〜不〜幸〜も〜雪〜介〜ハ  
役〜さ〜〜ま〜て〜其〜つ〜と〜め〜や〜且〜あ〜る〜霧〜を〜拂〜あ〜て〜所〜不〜せ  
穿ち夕舟を亭犬を赤て〜る〜より〜ち〜う〜さ〜臂〜を〜か〜〜く  
又習習る此赤錢小元の道み度り志のわさりに横

下

十



おどろけてと悲し其多へ渡さばもさあれきた末あつ  
雲の跡を越し一愛縁測限の川をこころりて辛苦  
いそんうさふしとされと敷冬に立帰酒の常もある  
うも炎夏の喰控爪も核小汚るくその雪唯  
終日棒をもち雪飛り出女の立いさ投賽結務  
貞凛ハカハ一あつさむあつ人もあつんや果ハ川合喧  
喉のけとあつ稲妻の働して大業物のつとあつ  
吾とも先汝よりかふり控らる併え来因らるる  
無心あつれ其流りあつりくも是世用の用あつれ  
あつり一吾うさむ世波の行路難を系提のあつり  
たよむ殊不足小怒わつり往来三百余里り留汝小

二百万歩の勞をうくされ日毎に扛夫の難状は波  
益好しといとも汝の初聲らありふみ控かこく見さ  
徳をよみて感さるるめは里安小辨を促ていさく汝  
小剛小彼控杖子乃一則子無門和尚此言をとりにて  
投過斷橋水件歸無月村とありしハ汝の有聲ふ  
しと是小悟入せし貧屬榮枯ハ一握小けりし  
知里只其自然小控りんあつとあつとあつ

紀行

鳳郎

初集の心や清くうなるめてと記さふうかき秋の  
暮れ寂莫多ふ流あつりみ流とあつてお人のまふ



あてさ家ら風月の境界より凡庸の人干渉の沙  
汰ありわれハ昔今此是非を以てきほもわら  
とやうれつてせおほ家幸かうむを家國小奥  
の邑くをめぐりしをうらうらわす依屋干  
入る一畝のやうなとまをめしお阿ととおほ  
しき年のわら六十強う四五うは屋ききせ  
おほ田歌とのこ本孫捨の糊こそ多あるに故取の  
ぬさたちの支指をわをせだらんちとある田舎  
めじしを急何られとまうくしきまをうて調度不  
んと屋ききはあり其質朴なるは古風のおことうある  
るいあへいりある長の果ふもややんぬりあう

志のせつあるものおもひやうけて干鱗ヒレの日南うさ記も若  
英つとせし山海の珍味あるとあぬ思ひをあしや  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
めー喰い仕舞ひわい濁酒をうまきくくくくくく  
やうやうあも古代めける大なる盛をととせし  
かのをたしうやうくくくくくくくくくくくくくくく  
うやうやうううううううううううううううううう

毛蓼説

路宅

青帝一程をりて予り庭ふせしむるものあり  
不謂毛蓼あり識者曰是一名馬蓼ありや又



或人馬蓼ハ大蓼の名ありて毛蓼ハハブテコブネとも  
以ふと何きを是とて何れを非とせんや予ハそれ  
襖貶みかゝるは是非中の一塊面白根をおろ  
して自一種の馬蓼とある又是あゝんや非あゝん  
やさゆみ今年あゝんの人を六月を以て用とせし名  
あゝんを博士ハ八月をもて是み用也亦くく  
まを是とて以のまを非とせむや拙をもて糸ふ  
へさふわゝるは非是を方正の流ありとばいひあゝ  
是非の間おぼえて再ひ今宵の太宵おむらひ清  
光ハ肺肝を曝しし蓼の種を討て交ハ是非  
をいふは独馬蓼耳わゝるは蓼をもりて馬蓼耳

あゝんはふたゝふ

名月辭

圭雨

人こうろはささうきさや上弦と月の名のつら  
より名ありはふを宵とのよ中を月のおん  
かきりる曠野沙村或ハ溪林海濱くふかゝる不  
こうろ逢ひ一敷くおもひく如舟を死の海  
たも見まわしき月のふくあはるる中耳うら  
急喉あゝみ者はみちのく山の月あゝる  
こゝろふらあゝ思ひせられてたゝひあゝる  
うゝる宵を人々とともに文會てふる











魚しきふほとに等し物を知てさし免やま  
るべきとてほちをら免やまわさく哉

俳諧古今説

井里

夫俳諧を和家の流ありて其免連系あり人皇  
十二代景行天皇の御宇日本武尊東夷征代志  
多し甲斐の酒折ありて新治筑波を由て以て秋  
篠つると縁路へるに即ち中野新羅のありて秋  
みをさく秋萩日みを十日をくみさくありる  
是連系乃監觴るやされとことと謂ふありて是

の文字も定まらぬ系系小依保川の糸をせさ  
入き極し田をく尼のよめは小菊る子縮飯ハ  
獨あり免と家持の下の句縁あり上下今も  
是そ連系の始ありき又貫之の三十一文の  
首を上句と下の句とさうらひまらみあり其後  
村上天皇御製上句小滋野田信下の句をつけ  
らまたりありる平の清盛公下句小登蓮法師  
上の句を縁し新いありてありわけさかきと  
かくて幸ありことありて和とありあり  
らうち而謂ね連系こそ今の俳諧ありて松  
永貞徳よりめて宗匠とあるされ終り











とてあももゆれに仙の鐘を抹香くさくさるの  
か〜られ玉と歌よみま〜あ〜をさるふとさぬ  
くあり懇田の杜のまれ茶か〜中より并せ  
とてゆきせほきとも尚やまの箱こよりて何ぞ  
とせむと同ふりれちまふさ〜

蓬萊の古着とあ〜と秋の月

楨小庭記

寥松

さ〜のさ〜やと雪をさ〜あ〜はせ〜ふか〜さ〜り  
あ〜のららめにはと〜さ〜た核みもや四もや

人の根ら〜うれ〜其や〜か〜た〜の〜心  
とめはそみけるさ〜い〜自あ〜はか〜れ月の  
共志れそあ〜あ〜く〜と垣うつ暮あせつ〜あ〜  
む〜も核のあれやす〜もす〜も〜も〜ら〜昔の人  
た〜ら〜さ〜ら〜か〜さ〜あ〜ひあ〜う〜てひ〜きを焼〜し  
と〜も〜さ〜の〜そのら〜を〜あ〜てあ〜つ〜あ〜てひ〜し  
と〜も〜は〜さ〜ま〜た〜や〜集〜も〜や〜も〜〜と〜さ〜み〜と〜さ〜る〜の  
み〜ら〜う〜は〜や〜う〜ら〜あ〜の〜さ〜ゆ〜ら〜の〜玉〜さ〜〜ら〜せ〜く  
ゆ〜ら〜さ〜〜あ〜さ〜末のま〜い〜さ〜の〜う〜み〜す〜う〜く〜  
ま〜〜て〜や〜わ〜さ〜風〜さ〜や〜う〜吹〜さ〜れ〜か〜〜あ〜さ〜の  
き柳あ〜れあ〜ら〜う〜ち〜〜さ〜み〜ひ〜ら〜あ〜の〜ま〜ま〜











敦盛の御墓を傳ふに何となく神の姿拂ひ  
わく福をあらと次ぐのしむりこちて ちちち  
より六三の谷二の谷とやかそくきくはふそや  
夕日の名跡 喜山子かきまてきくしやとり  
定めんとし何くしきき寺をきくはふそや  
身まわりて其堂の今果しあし人のきくはふそ  
むあしき麻とそりしむきとせんまあし  
片しそふふふまの御伴ふし骨の窟を新ま  
まつしんとおうてつるに火とゆの傍見しと見  
極人そ何玉の人そ御籠りあしそ先やとり定て  
よろこむくちりあしききしききしききしきき

おとけし家良ししてまふやうけ門前ふ小  
家わし是ふきくしと新まあしあしきの傍見  
わあしきとしきく子細あしきしききあし  
まぬしきくしと教へきくを力あて杖突あし  
ゆくあしに灯の影あしきくしと島の中ふあや  
しきくもたて跡しききしききしききしきき  
きくしきくにわあしきくしきくしきくしきく  
しきくしき親父あしきくしきくしきくしきく  
船のまきみ顔きしきかあしきくしきくしきく  
よりもつあしきくしきくしきくしきくしきく  
あしきくしきくしきくしきくしきくしきく







秋のこも次广の衣をおゆえりり  
山くまわれと寝えり乃家<sup>ま</sup> 兼々  
とわらふしふ湖物のささる月のあつらふかきこれ時  
かまひりくく。

夕顔頌

少翁

そも梅をまきり先あちて雪おくらもいそ  
咲出により花の足もさりふあふし朝鳥を更  
りしそれとりふあつらふ且あつらふ唇を動しぬれ  
寝ふ夕鳥獨りふへを待て咲出さるひとか

あつらぬえせものあつらふしつらつら其わりを  
見ふに依屋の書炭垣あつらふ蔓の浪返いのか  
りき家さるうまやさつらあつら情おけるや  
よつらひつらつら竹時あや又夕鳥の上の糖ひ踏ふ  
かほあつらつらあつらつらつらつらつらつら  
されつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
花街柳陌ふ出る推行女兒ふつらつらつらつら  
実を踏ひてる形ふ来あつらつらつらつらつら  
菽業師のさる森のあつらつらつらつらつらつら  
天の吉葛<sup>ヨサツラ</sup>と唱て水を汲み火を訪き湯を凌の  
蒸ありしとやつらつらつらつらつらつらつらつら

下

廿四



殊で〜ハハと門遠ま〜し〜とれと人の多々拘  
し〜竿ふかされも香具山母干老んふ妙の衣と  
んえ風あふれても天津をとめ如領中振うとあや  
し〜れ是を鼎ナベ小熟すま〜味ひ甘く能く人の脾胃  
胃をと〜れ其印おほひありといひ〜し〜とれハ  
常の態ま〜と実乃ふ来あるも取捨得失の事ら  
めり〜らか〜と〜

蟬説

一飛

蟬小較種あり其か〜ら〜し〜ちひ〜と〜て 蟬セマシ

色ある四五月頃鳴あり忌後の〜ろ色あ〜て身ハ  
ち〜み〜とてセマシ冠乃如く九十月小なり壽凄急小以そ  
か〜く鳴もあは色セマシの青きわり薄赤さあり較て  
六七月最さるむあり又一種二月中小鳴ありセマシ蟬姑と  
いふ馬咽より蟬セマシ等なりあるやうて十七八種其  
類ひ名杖舉てか〜〜〜し〜日〜し〜つ〜く〜  
法師セマシ名を夢の竹セマシふちやまさをわけて凡を  
いふの〜あり内小又一つセマシのあ〜れあるものありセマシ亞  
蟬といふ小兒セマシ〜取て是ハセマシ啞セマシありとを〜し〜も  
い〜て捨るこ〜と〜し〜れ岩セマシ松セマシ松セマシのあ〜る  
逍遥〜壽を春秋と志〜し〜てあは短とせし

註







あく廣くうまはしきけさひわやしらも希<sup>うか</sup>見  
のめも又もろくくぬる物やとあるんあき草花の  
ことともさるえさりき実蓮んんりりふぬし  
も夙目さめとく起ゆるりこさるわめや獨  
こちきふ子使例不在て曰汝者子釣藤  
を好むたましく釣起しと家ふ来りて得  
た里親あまを世にひ習えしつる釣藤釣起  
の諸餘あま子棄るあまんおほよそ釣藤  
ハ人ころの物まにや釣藤とさしつれと  
いきたあしと釣めまめわらかの人昼寢  
して源責せられし教ひ小異ありとくともい

ハ急乃罪のうれかかかん只ほのくさん起そむ家のそ  
を要とせそ亦とさめやまてり 夙起朝せんせしも  
假<sup>か</sup>寐して既小賊害をすぬられたる趙正卿ありとる  
をんもせぬ釣起しと一ひみまへるこそ後小ひみ  
胡楸の丸呑ふめをもく天地と記しと茶物も  
おのつと釣開しと今やと寐しものちう屋て記  
めつれそそ自然の妙用あしと不謂老子孫名を  
されいひさるる屋さ これを世急た急お釣開を  
とも小結目さめ能冥と性ありめしと聊も  
勅めいさかも急あさるをぬあしとみおとや  
以てん人見みおひ安ふとつて小行鷄大鵬のつれ



志ありと露あふおひて恍惚とて遂に物寐  
の意もわあうらみ風起むとまもも何まう物まふ  
めしき事を知るのこあう物相く天の物冥と  
等しうのこ何まう無何れう有吾只啓室と  
以て更り笑みて黙然と見えう蓮葉の匂ひ  
香あてま字治の綱伐あわのこや行首あうはそ  
ありふ草花うれを結あう周縁あうそ殆無為の  
と目とこかうあうつれと例の篩カテヤまて以てか  
忽忘をたまう物め

吹上國見平記

真洞

今年孫生れ末吹上れ此神おまきんとて例の友  
とら物まあうとて物みうりまあぬける系柳の  
朝朗の弱の多羅引弛め良あうせてあ見まう  
攀上れいあう人えう。松と杖とを更ふ山あう  
小屈曲あう家柵とら良あうそい物け答あう  
崇よ香まは匂ひしそ被の二百七十索着の哥結儀  
もまきく思ひ深へられ嘗あうのこみ鳴うそはも  
受得う何ありえうこれと遠小酒おの物神を  
八重露れ雨衣あうく山崎良出の板小棚引か

ト

共



葉の吹拂をかき塩の山の辰己小利益の流せ  
たれ見つ川の絶ぬ流を踏てあうそい白雲を千か  
くれ寂寞とくく危生濟度の海未ありきく不  
和川以てその驛をあめめくく題目そのむう  
くを疎しきまれ川山川の甚ふあそ荒川の  
名みよもれ芦川のあくくの體も源小くく  
橋跡よかたれを詠ほよかくまきをのうれ笛吹  
登きふくくぬぬをわくくく所集のこあか  
あくよとあそせ富士川の名ふあうれてそ黒沢  
山をめぐりて舟客のくくく影をかくくく市  
川の里ハ卯花紙干あくく多時多時風情

あり初々山千流ひ流と帯きくくく雪在わうは  
雲のたぐまきひ鳴めくくく雪の脊中くくくえあふ  
慮悉美景をそくも自然あうぬめくくくあうく  
感動下らふ初吹上の山又上まて人志くぬ  
太山亦の繁くあくくあひく先達の笠をか  
たぐぬ折あくくく巖時まくくく叫く人を叫が  
水を看志をくく啼く石み珠<sup>シズメ</sup>あつとく人の  
志とへみ付を穀み汗くくくいよれハ谷丸のくく  
吹よそそ実吹よそくくあきくくし



送鷹園主東遊序

静菴

一堂のうちにありて、らんを乾坤の外に遊を  
志むるもの、風人のとよに志を交ありとれハ  
古人も幻術の才一とて、以てれ、一かの一堂の  
茶を煮る翁、手とつらまて、無人の境、手  
か、くさめをえ、竹馬、寄せて、郷里、手、帰、手  
わ、く、旅、店、手、遇、る、方、士、の、術、を、か、り、多、刹、那、小  
生、涯、の、榮、花、を、ま、ら、め、も、ま、む、れ、ハ、榮、飯、の、み、え  
さ、ふ、お、と、ろ、く、か、は、家、あ、ら、ひ、み、を、あ、ら、は、只、一、句、小  
魂、の、入、り、以、て、飛、り、ぬ、る、を、以、て、柝、所、魂、を

お、ち、よ、り、た、と、い、招、魂、の、法、を、傳、へ、る、も、凡、夫、の、た、と、  
や、ま、く、入、つ、へ、さ、み、の、く、は、志、さ、り、小、機、ひ、お、ん、を  
ま、れ、ハ、崑、山、の、玉、光、り、ま、し、ひ、恍、惚、と、く、ま、ま、の  
術、を、く、く、あ、よ、夫、百、急、と、採、り、密、と、あ、ら、ま、の  
其、辛、苦、あ、ら、も、自、然、の、妙、術、ま、ら、し、以、て、や、竹、を、ま、の  
修、して、画、玄、の、圃、小、耕、さ、ん、と、ま、る、も、の、ま、その、実  
比、お、し、く、て、ま、れ、あ、ら、は、景、情、を、求、る、ま、ら、ふ、に  
何、そ、は、ん、を、悠、幸、手、持、を、く、む、る、の、ま、あ、ら、ん  
鷹、園、の、主、ま、お、お、く、ま、ら、り、わ、り、て、ま、あ、を、活、の、の  
其、の、久、し、く、年、又、甲、子、の、星、弱、小、報、を、加、へ、て  
古、翁、の、細、乃、の、わ、し、を、た、と、り、奥、羽、の、勝、槩、を、自、得







垣みとかくは風のきくうふさひもつりて  
りみせしもそめてふ三疊のかられををつりて  
観修のいとはわるともさるるか小義素乃  
墨の痕をきくよのころより卓ひつるを爐に  
かこつふあは是あられうたふ主とさるる  
をかりこめしき白炭のむらむやをを志の  
まのたよりみさくしき葉あめれと風爐  
平かてそまきしきをさるのらさひひり  
時うつりゆしきもさるるあられつとるも  
ふられしなましつふ人あはて志とまあつと  
しきうつりもなましきとる人あはれと葉砂

とる事をきみて共平一主客のころちれさきはを  
をかしきもさる安さを書あつたあめ  
一室あられありとれとあつあや嵐をたいて  
ましつちめしつめたるひふやと笑ふ人もあ  
んうしあめ南港小築とりふれ住居のいそ  
きぬとろ社交あしこの四字を葉醜ふ  
鐫おくりたるよりつひそれおまうせてかよふ  
るりあをありぬあは澤姑をめつるうあまの  
戯まふ赤電子鴉爪室あは書もあつし  
きた似てさる免図らしかつはとらさるや



自誠

護物

世より山と形ふ人も世を棄るをあらふ人も  
 其の如く〜と世法を〜女の心一筋ふかえ  
 らば思ひ及ぶふは〜りも成就を傳や有べき  
 地千世ふ〜その地ふよ〜り〜り〜り  
 りも傳れ〜その業を〜り〜り〜り  
 たうぬこそその〜り〜り〜り〜り  
 ありや舟千舟有松ふ世虫阿〜りも虫ハ  
 芋ふ生〜り菜虫と菜ふ生は菜虫を虚を〜り  
 と〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

たう酒虫を〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
 虫の類を〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
 膝ふ菓と〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
 う川ハ鳩鳩の芥の柄も朽あん世を形ひ〜り〜り  
 空に登り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
 め〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
 一〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
 結菴の煙火ふ斤羽焦〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
 知〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
 多世の造化ふ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り  
 りと〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り







きつとら人の殺ふふさうめてそれともええりぬ  
おてめさまの慶あなぬうはま宮けいらまらめ  
くらあささ式のをさるはるをまらあさるさ  
あさ神田と名一ろとのむやに坊さう 坊さ  
かりとのませく志はらひ幕むかしくしてあめ  
場をさうけさると社務津まら鈴屋へおと坊を  
うさくあめさふおさう 坊さかしくさ坊さあ家  
とらあささ日る雲のわけさうさう坊あさささ  
あささささささささささささささささささ  
さささささささささささささささささささ  
か平志と車をあさるさささささささささささ  
さささささささささささささささささささ

ささく捲くさてかあみやせの宮は子ささう津さひ百味  
の容盤を祖しささあ秋の禮杯をささささささりの  
あさ難波の壇管をわさうさささ君の警使かうあり  
来ましてあはやけの威儀を志さうさささりのさ  
のさ別當は僧侶の何さささ家さささささささ  
めりさささささささささ難色行司あささささ  
あささささささささささささささささささ  
ささささささささささささささささささ  
あのをさささささささささ乳ささささのかはささ  
のあさささささささささささささささささ  
はさささささささささささささささささささ















何うもいふをよひひふを好めたる夏の簀  
捲あづらんよりも狂まきほしうあつたあつて  
吾もわくをうくくも破るく思ひつゝも  
さまうに捨くたこそおろろあも無慙あれ能令  
弾ともんをばうし何もの死あまをしと志  
しむるや

鴉鳥辞

解雲守

斥鷃を九霄の鵬を羨まむと甲ふ似合て穴  
を穿る鳥を危きものもよも志くは賢い

さしあふ家そむらひけあさかの梅お白ひあ  
羨むまの秋も五月毎の晴るあやあくく  
秋も秋の秋の月のぬけけさあもくら啼して蘭  
閨錦帳の夏をや婦もま樓の曉あぬ軒を響  
うし旗雲の白あへあを啞くやあきくふあ祥  
啼て遠く境の人を志くをせ目のあひさりもむら  
うくわぬあまひを抱を泪如雨と涙きも実  
さそあらんかきうあれハ貞観の帝ハ一枚小  
かへて全樹ハ棲あんとそのまはひしや  
あぢあぬ君とくらくとを啼くつつけしハあ  
めささるん地そせは笳のあきとる人の後也



おぬうれはわ〜と夕へとあ〜糞土のあ〜れを啄  
牛舌の腐肉を喰をむととを黨をあ〜陣をあ〜  
あ〜る市の中此菓餅を給〜ひ又ハ邑里の家根を  
堀り小多此菓をくひあ〜其振舞ひあけ〜かそ〜  
〜能理擅現あ〜ま〜かハ林氏ハ鶴あ〜ま〜はし  
〜と〜か〜あ〜か〜汝ハ罪をせめ候も彼の斥鷃ハ  
待〜もあ〜候も汝を電め候〜中〜笑  
あ〜笑と〜あ〜



